2026.9.30 No.24

文窓 文学部だより

ふみのまど・fumi no mado

KOBE UNIVERSITY



文窓会ホームページの URL
https://www.bunsokai.com
スマートフォンでも文窓会ホームページへ！
右の QR コードを読み取り、画面に出る指示に沿って操作するだけ。
スマートフォンはこちら▶▶▶

特集／私の現在地

新入生・卒業生アンケート p12-13
神戸オックスフォード日本学プログラム KOJSP 第 13 期生修了発表会報告 p14
研究最前線 p17
最近の著作から p18
報告 p20
近況 p22



神戸大学文学部 同窓会 文窓会

事務局：〒657-8501 神戸市灘区六甲台町 1-1　TEL&FAX 078-806-7207（水曜日 11 時～ 16 時）　https://www.bunsokai.com/
連絡用メール：bunsokai@gmail.com
文学部：総務係 TEL 078-803-5591　FAX 078-803-5589　**教務学生係** TEL 078-803-5595　http://www.lit.kobe-u.ac.jp



会長12年の一回り

文窓会会長　1968年卒
武藤　美也子

「文窓会」会員の皆様にはお変わりなくお過ごしのことと存じます。会への日頃からのご協力をありがたくお礼申し上げます。

この2026年度で会長になって12年目。日本の干支の考えでは「一回り」ということになります。ここで私の会長時代を振り返ってみようと思います。

2014年の2月6日に池上会長が亡くなられ、副会長の私が残り期間を引き受け、2015年度から第8代会長として就任。会長としての最初の仕事は、1ヶ月後の教員懇親会での挨拶でした。事前に知らされていなかった私は、急に大勢の大学教員の前に立たされ、池上会長へのお悔やみと挨拶を要求されました。錚々たる大学教員の方々の前で、何を喋ったら良いのかしどろもどろで冷や汗をかいていたのを覚えています。

次に2016年に定員削減問題がおこりました。人文系学部不要論に端を発するもので、神戸大学にも学部再編が持ち上がり、文窓会は学部長とともに、大学に再編と削減取り下げの意見書を出し食い下がりました。また『文窓』14号でも「文系不要論にもの申す」という題で同窓生に投稿をつのり、その年の卒業生には「あなたにとっての文学部とは？」というアンケートをとり掲載しました。しかし再編は免れましたが、115名から100名に定員は削減されました。

2019年には文学部創立70周年を迎えました。HCDの学部企画で、「文学部70周年を語る」ということで同窓生7名に、御影学舎から学生運動時代、大学院ができ充実した研究ができるようになるまでの文学部の歴史を語ってもらい、『文窓』17号・18号に同窓生として70年を振り返ってもらいました。

その翌年の2020年からはコロナの流行で大学から学生の姿が消えました。卒業祝賀会も新入生歓迎会も2年間開けません。総会もZOOM開催です。文学部がオックスフォード大学と協定しているプログラムKOJSP（https://www.lit.kobe-u.ac.jp/graduate/kojsp.html）で、神戸に来るはずのオックスフォードの学生も入国することができません。しかしこの時私は英国にいる学生たちの修了発表会並びに質疑応答に参加することができました。この経験は、英国にいても、また事情で大学に来られなくとも、オンラインで繋がることができるということを教えてくれました。

話はかわりまして、同窓会に会費は最も大切で、活動は文窓会費と協力金で賄われています。大きなウエイトにあるのは新入生の入学時の入会金です。ですから入会金徴収は大切な活動でした。2017年までは、入学手続きが行われる百年記念館の前に、全学部の同窓会が机を並べ、会報誌や文窓賞作品集を並べ、入学者に声を掛け文窓会の重要性を説き、会費を納入してもらいました。同窓会が新入生と直接話せる貴重な場で、大変でしたが若々しいエネルギーを感じとれる楽しいひと時でした。これと同じく、同窓会主催の卒業生祝賀会と新入生歓迎会も、学生と接し学生生活を身近に感じることのできるとても大切な行事です。卒業して久しくなってしまった我々に、学生時代を思い出させ、人生の時々の節目を体験させてくれます。同窓会の役員をやっていて良かったと思える行事です。

私は『文窓』14号に「文学部の主体は教員と学生です。同窓会がするべきことはこの二者を応援すること。すなわちより良い多彩な学問分野の教員を確保し、後輩には自由に学問できる充実した研究環境を与え、優秀なる入学者を確保する。そうしなければ文学部に押し寄せる荒波を押し返すことはできない」と書いています。これが同窓会の役目だと考えます。

今期以後に実現したいことは「輝く神大文学部生賞」の設立です。文窓会には長年手付かずで残っている資産があります。それを神大文学部の為に有効に使いたい。「学生で何かをしたい、その為の資金が必要という場合に、目的や目標を明確にし、それが神大文学部の名を社会に発信することになるなら、援助できないか」。ただ具体的方法が分からず実現に至っていません。ぜひ近いうちに実現できればと考えています。

12年前に何も分からず会長になり、四半世紀前に卒業した母校に貢献できる役目を勤めさせてもらったことは、貴重な経験でした。このような大役は、他の役員の方々の協力なしにはできなかったでしょう。感謝しています。

近年同窓会に風が吹き始め、新しい流れが出てきた気がします。

みなさん来年からの文窓会に期待してください。

2026年7月記

神戸大学文学部生の人間力・文学力・未来を応援する

第20回 文窓賞 2026年

学生レポートコンクール結果発表

今年、20回目の文窓賞には様々な専修の学生から9作品の応募がありました。8月6日の審査委員会にて、下記の通り受賞作品（優秀賞作品、佳作作品、新人賞作品）が決定されました。

優秀賞（表彰状と賞金5万円）

「海の見える坂で」　光野 麦穂（英米文学 4回生）

時間に追われる毎日を送っていた作者は、イタリアへの留学で初めて「立ち止まり、考える時間」を持った。そして就活の際、何をやりたいか、大切にしたいかを幾度も自問し、働きたい会社に出会えた。

「文学部の良いところは、無限大の選択肢を選び取るための思考を助け、表現力が身につけられる」という作者の言葉、社会に出て様々な困難に出会った時に生かしてほしい。

佳　作（表彰状と賞金２万円）

「記憶の扉」　髙井 恵里奈（心理学 3回生）

昨年10月、母を自殺で亡くした作者は、母の記憶を心の奥深くに閉じ込め鍵をかけた。しだいに母を思い出せなくなっていく状況に葛藤する。誰もが苦しさ・悲しさや忘れたい出来事に遭遇する。いつの日か、できるだけ飾らず曝け出し、書いてみるということは自分を見つめ、先に進むための力であると感じる。

佳　作（表彰状と賞金２万円）

「教養でつながる」　清水 さやか（フランス文学 4回生）

1年で書いたエッセイの結びは、「教養を身に着け、それを通して良い人間関係を作り、豊かな大学生活を送りたい」。

部活や留学などを経験し、教養を通じて豊かな大学生活が実現されていると作者は実感する。しかし、「語りえぬもの、核心に触れるような話題をさける時に教養を用いる」とあるが、教養とはそんな容易なツールなのだろうかと、疑問が湧いた。

新人賞（表彰状と賞金1万円）

「文学を、学ぶ」　工藤 陸（1回生）

工学部で学んでいた時にかけられた母の言葉がきっかけとなり、一年間休学、自分の本当にやりたいことを考えた。ある瞬間浮かび上がった「文学」を迷いなく選択した。目標は作家となること。効率や功利性を重視するグローバル化の中、人々の心はより閉鎖的になる。そんな世界で、文学の果たす役割は大きいと感じる

新人賞（表彰状と賞金1万円）

「会話の先にあるまだ見ぬ世界」　藤原 帆夏（1回生）

母の誘いで参加した小学校の夏祭りのサポートで、久しぶりに昔の同級生たちに出会った。そこでの会話から、自分の「心理学への熱」を再確認した。人と触れあい、様々な体験をして、心理学を深く学んでほしい。

選考を終えて

受賞されなかった方を含め、人文学を学ぶ意義や心の有り様につき深く考えた作品が占めていました。自分を見つめることは非常に意味深いことですが、より幅広いテーマの作品にも出会えることを期待しています。

（文責　審査委員長　西川京子）

選考委員

白鳥義彦 研究科長（社会学 教授）　中畑寛之 副研究科長（ヨーロッパ文学 教授）　古市晃 副研究科長（日本史学 教授）
武藤美也子　吉田浩次　廣野幸夫　三宅征彦　中川伸子　市澤哲　谷上光晴　津田薫　梅村麦生　成田千紘
西川京子　（計14名）

「文窓」23号の3ページのお名前に間違いがありました。訂正してお詫び申し上げます。
【誤】　有川　悠馬　→　【正】　有川　悠真

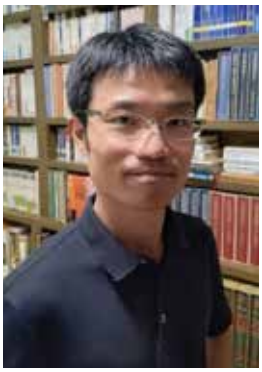
三本柱の原風景

藪本 勝治
（国語国文学専修・2006年卒、2011年博士課程後期課程修了）

「現在地」を語ることは、来し方を振り返り、意味づける作業を必要とするのではないでしょうか。たいていの場合は、人生の岐路において未来を見通そうとするときに行うものでしょう。しかし今年43歳になる私は、30代に入ったあたりから身辺の変化が緩やかで、改めて顧みる機会もなかったように思います。そこで、原稿の依頼をいただいたのを幸いに、「私の現在地」を確認してみたいと思います。個人的に、人生には三本の柱があると考えているので、順を追って見ていきます。

第一の柱は、家族です。現在、妻と3人娘（中2、小6、小2）とともに、琵琶湖のほとりに居を構え、総じて穏やかな日々を送っています。子供たちが小さい頃はそれはそれは大変で、激しい夜泣きやきょうだいげんかや無数の名もない家事労働で妻ともどもフラフラになりながら毎日をしのぐような感覚でしたが、気づけばずいぶん手がかからなくなり、私も遠慮なく飲み会などにも出席できる身分となりました。とはいえ、大きくなったらなったで人間関係で悩んだり反抗期で不機嫌になったりいつまでもきょうだいげんかは絶えなかったりと、まだまだいろんなことがあるわけですが。ともあれ楽しくやれているのは、ひとえに、子育て大好きな妻のおかげです。その妻というのは、神大文学部の同級生で、もう20年ほど連れ添っていることになります。考えてみると、第一の柱のルーツは神大文学部にあったのですね……。

第二の柱は、仕事です。世のため人のためそして生活のため、神戸にある中高一貫校（灘中・高）に国語科教員として奉職しています。自分の専門性を活かしながら生徒たちを賢くしてやる仕事はやりがいに満ちており、またきわめてホワイトな職場なので家族に負担をかけることも少なく、ご縁に感謝するばかりです。妻の職場がある大津からの通勤だけはそれなりにハードですが、毎日読書時間を確保できているのだと前向きにとらえるようにしています……。と、また考えてみると、今の職場と出会えたのは、学部から院まで一貫してお世話になった指導教官、樋口大祐先生のおかげなのでした。灘の卒業生である樋口先生のところに、たまたま国語の教員募集の情報が入ってきたため、ちょうど博士論文提出のタイミングだった私にお声がけいただいた、というわけです。ということは、第二の柱もまた、神大文学部に与えてもらったことになります。



第三の柱は、「趣味」です。括弧つきなのは、それが単なる遊びの域にとどまらず、自分にとって生き甲斐の最上位にある、という重みを含んだ「趣味」だからです。人それぞれ、「これができないなら生きる意味が損なわれる」というような「趣味」があるものでしょう。私の場合、それは文学研究です。大学院では源義経の一代記である『義経記』を、教員になってからは鎌倉幕府の正史『吾妻鏡』を、継続的に研究してきました。いずれも、人間が過去を振り返って意味づけを行い、歴史というものを構築してゆく営為について、具体的なテクストの読解から考察するものです。『吾妻鏡』論については二年前に中公新書から出版しましたので、ぜひご一読いただければ幸いです。また『義経記』については今秋、弁慶論の形をとって新潮選書から上梓する予定です。もちろんのことですが、この第三の柱も、神大文学部で学問研究に浸った日々がはじまりにあります。

家族、仕事、研究と、私の現在地を確認したところ、どうやらすべて神大文学部に由来することが見えてきました。ちなみに、人生には三本の柱がある、と思い始めたのも、院生時代に先輩方や後輩たちと飲みながら語らっている時でした。将来なんて見通せないけれど、大切なものが三つくらいあれば、どれかがしんどいときでも他のどれかで支えられるからなんとかなるだろう、と。これからも、なにかとしんどいことがあるでしょうが、三本柱を大切にして乗り越えていきたいと思います。

さしあたり、次は『平家物語』論をまとめたいと考えていますが……実は、これは卒論で挫折したテーマに再挑戦する試みなのです。どこまでいっても神戸大の原風景とともにある、「私の現在地」です。

西松屋とユニクロがあれば

佐藤 瑞恵
（西洋史学専修・2015年卒、2017年博士課程前期課程修了）

神戸の地で修士課程を修了してから9年がたちました。修了後は入国審査官として勤務する中で、転勤に伴い大阪、東京、愛知と移り住み、数か月前からは産育休を取得しています。

これを書いている現在、映画館では『プラダを着た悪魔2』が上映されています。記憶が正しければ、学部1回生か2回生の英語の講義で、前作が教材として取り上げられていた気がします。講義では断片的にしか見られず、ストーリーが気になって六甲道にあったTSUTAYAにDVDを借りに行ったような。特段前作のファンということでもないのですが、懐かしくなり、夫に子を任せて観に行きました。ファッション業界における登場人物たちのキャリアや成長を描いた作品の中で、俳優陣のきらびやかな恰好もさることながら、仕事に全力で向き合う姿が、現在の私にはとても眩しく感じました。

映画の終盤で、登場人物が「仕事が好きなのだ」と語る場面があります。彼女たちの華やかな世界は私の日常とは似ても似つかないものですが、この言葉には共感します。私自身、働くことが好きな人間だと自覚しています。職業柄、コロナ禍や紛争等国内外の激しい情勢変化によって業務が年々多様化する中で、国の施策の動きを間近で感じられる環境は興味深く充実しており、仕事中心の毎日を過ごしてきました。空港での24時間交替制勤務や本庁での多忙な業務など楽ではなかったものの、働きたいと思える周りの人や環境に恵まれ、あえて仕事で忙しい日常を選んできたような感覚があります。

そんな私にとって長期間職場を離れるのは初めてで、それなりに勇気のいることでしたが、「育児に専念する毎日では仕事のことを考えることもないのかな」と漠然と思っていました。実際に、子という存在がいる日々は想像以上に慌ただしく、翻弄されっぱなしです。どうやっても泣き止まなかったり、絶対眠いはずなのに全然寝付かなかったり。今日うまくいったことが明日もそうとは限らず、正解のわからない毎日ですが、最近はこんな日常も新鮮で案外面白いものだと感じています。



でも、その想像以上の日々の中でも、ふとした時に「今この業務をしている時期かな」「あの法改正はどうなったのだろう」と考えている自分がいます。子が大切で側にいたいという大前提はありつつも、それと共存して、働きたいという思いがあります。産後しばらくしてこう感じていることに気づいた時は、慣れない育児からの現実逃避なのだろうかと思ったものの、今は今で貴重な時間だと感じているし、それこそ気軽に映画を見に行きリフレッシュできるくらい家族や周りのサポートがあるので、そうではなさそうです。やはりそれだけ、仕事が傍らにあることが自分にとって自然なようです。せっかくの育休中なのにと少し後ろめたさはありながら、これが自分のリアルな感情なのだと実感しています。

働くことが好きというのは、周りの人や環境に助けられ、これまで健康に過ごせているからこそ感じられることなので、ある意味幸せなことだと思います。一方で、価値観がどんどん多様化する中、時代に逆行している面もあるのかもしれません。先の映画の台詞には「色々なことを犠牲にしてきたけれど」という前置きがあります。プライベートを犠牲にする彼女たちの働き方は、以前より受け入れられなくなってきていることでしょう。私も、仕事をすることで子や周りの人に苦しい思いはさせたくありません。働き続けるためにこそ、育児はじめ私生活との両立に注力しなければと考えています。

今後は復職と同時に平日の1人育児が始まり、しばらくは時短勤務をしつつ、日々の生活を必死で回す日常が待っています。思うように仕事ができない時や、働きたいなんて思えない時もやってくるかもしれません。時にはスマホを放り投げたくなることもあるかもしれないけれど、就職してからこれまで、働くことが好きと感じてきたこと自体は忘れずにいたいものです。復職したら、楽しく働いている姿を子に見てもらうために、周りに感謝して自分なりに精一杯勤務したいなと思いながら、帰路に就きました。

文学における雑食性とアメーバー的読書

谷上 光晴
（国文学専攻・1976年卒）

高三の時、私は私を文学へと導いた二つの言葉と出会った。

その一つは、小林秀雄が『様々な意匠』で述べた「彼は哲学者にもなれたろう、軍人にもなれたろう、小説家にもなれたろう、然し彼は彼以外のものにはなれなかった。」という言葉と、サン・テグジュペリの『星の王子さま』の言葉。「大切なものは目には見えないんだよ」というこの二つである。この二つの言葉には、高校時代に出会っていて、ある意味私の人生を決めた言葉になった。

農家の長男だった私は将来、高校を出て、実家の農業を継ぐということになっていた。ただ、私は、中学、高校と歳を重ねるにつれて、勉強の面白さや、知識を得ることの醍醐味に目覚めてきて、大学に進学したいと思うようになった。紆余曲折を経て、神戸大学文学部国文学科で学ぶことになった。

『星の王子さま』は、私にとって、子どもの心を忘れないという問題意識としてあったので、大学での部活動は「児童文化研究会」に所属した。文学への目覚めは、小林秀雄の言葉に導かれるように、詩や、小説、評論や、哲学にどんどん惹かれて行くことで深まっていった。

しかし、私は、必ずしも、授業に熱心ではなかった。放課後は、部活オンリーみたいな生活だった。しかし、サークルでできた友達は、終生の友となった。一方、学部での出会いには鮮烈なものがあった。たとえば、文学部の演習では、私がなかなか言葉にできないことを、論理立てて、人前で主張できる仲間を、すごいなあと感動して見ていた。

私が当時心がけていたことは、自分を見失わず、誠実に生きていこうということだった。足を文学部と、童研という部活の両方にかけて、できることをやっていった。学部では、先生に声をかけていただき、お家へお邪魔して、貴重なお話を伺ったりしたことが、私の中では、煌めいて今も鮮明に思い出される。

また、同級生が立ち上げた「ドストエフスキー研究会」に参加し、いろんな学科の先生にお話をしてもらった。雀の涙ほどの謝礼しか出せない私たちのために熱い講義をしてくださった先生方に今も感謝している。



その時、私の中では日本の近現代文学を専攻しようと気持ちが固まってきた。卒論は『小林秀雄論』。私の読書遍歴は、小林秀雄の読んだ本を後追いしてアメーバーのように伸びていった。今から思うと、あの頃の文学における「雑食性」が、今の私を作っているように思う。

部活も部長を任され、数十人のグループのマネージメントからいろんなことを学んだ。

高校の国語教師の道が、目の前に開けてきた。

それから三六年、兵庫県の県立高校の国語教師としてお世話になった。印象的だったことを二つだけ挙げておきたい。一つは、二十代に、縁あってある出版社の『古典文法』の教科書の分担執筆の依頼を受けたことだ。その頃、私は、言葉の世界、文法の世界にだいぶのめり込んでいた。何度もあった改訂にも付き合った。その文法書が、四十年以上経った現在も、版を重ねて、高校生の文法書の定番のようになって採択されていることは、嬉しく誇らしいことの一つである。

もう一つは、県立高校の最後の二年間を、定時制高校の校長として務めたことだ。人間の持つ可能性の素晴らしさ。一度目覚めたら、計り知れない若者の伸び代に驚嘆した。二年ほど前、伊与原新さんの小説『宙わたる教室』がテレビドラマ化された。さまざまなライフヒストリーを持つ定時制高校生のチャレンジとその頑張りを描いたものである。私が体験した感動と、同質の感動がそこにはあった。

退職後、私学の女子校に嘱託で採用され、図書館のことを任された。「生徒に読ませたい100冊」の選考に携わったことが、いい思い出だ。その縁で、兵庫県全県から提出された文芸部の詩の選考委員を九年続けている。生徒たちのキラキラした感性に触れ、昔、中原中也の詩に心を持って行かれたあの頃を思い出しながら、選考と論評をしている。

我が道に悔いなし。いまも、あの「雑食性のアメーバー的読書」を続けている。神戸大学文学部には、感謝しかない。

対岸の出来事

山根 彩花
（英米文学専修・2020年卒）

昨年の夏、特色のある大学を紹介する新聞の企画で、神戸大の海洋政策科学部を取材させていただいた。当時住んでいた大阪府南部からいくつも電車を乗り継いで、在学中は訪れたことがなかった深江キャンパスに足を踏み入れた。先生方や学生の皆さんが温かく迎え入れてくれ、練習船にも乗せてもらった。せわしない運航作業の中で、素人の記者が次々に質問してくるのはさぞかし邪魔だっただろうが、こちらが分かるまで説明いただいた。インタビューした学生の方は将来船長になるという夢を語っておられ、「すごいですね」と声をかけると、照れたようにほほえんだ。

船のデッキから望む神戸は、自分が知っているものと違うように感じられた。大学への登校を「登山」と呼ぶほど苦しめられた山々も、そんな汗くささはどこかに飛んでいき、泰然と我々を見下ろしている。山と海の間で猫のように細長く横たわる街も、大学時代はそれが自分の全てだったのに、遠く離れるとちっぽけだ。ふと「グレート・ギャツビー」で、ギャツビーがかつての恋人の住む対岸を見つめる場面を思い出した。ギャツビーは過ぎ去ったものをまだ強く求めているのに、やはりそこには隔たりがあるのだ。

休日の大学に忍び込んだのは３年前の秋のことだ。その時は徳島県で勤務していて、たまたま神戸に来ていた。卒業してから大学に行くのはこれが初めてだったが、何か特別な理由があるわけではなかった。好きだったケーキ屋のモンブランを買い、よく講義を受けていた教室近くのベンチに座って食べた。文学部は以前と何も変わっていないように見えた。木々の隙間に広がる海、やたら四角い校舎、うずたかく積もる落ち葉の一枚一枚、そこから立ち上る青臭さまでも。異物は私だけだった。学生時代、そのベンチで友人とお菓子を食べながらだべったものだが、あの頃の全てはもうそこにはなかった。今友人たちと会うと、昔と同じように遊びつつも仕事や結婚、出産といった話題も上る。それぞれが違う日常を進み出しているのだ。

新聞記者の仕事に就いた後は、洗濯機の中に入れられたかのような日々だった。昼夜問わず事件を追いかけ、裁判を聞き、自治体の施策を紹介し、堅牢なようで脆弱でもあるような国の制度や法律を勉強し、人々の長大な歩みを記事に凝縮しようとしてきた。大方そういう仕事だろうと予測はしていたが、自分が阿波おどりの「ぞめき」やアフリカのラブソングにハマったり、西成の三角公園で話を聞いたりするところまでは想像していなかった。全く予期していない物事の渦中に次々に放り込まれるのは、大変ではあるのだが、傍から見るより悪くなかった。この洗濯機から出る頃には、凝り固まった「自分」はすっかり漂白され、代わりにこれまで出会ってきた人たちが私の中を占拠するだろう。かつては自分だけが自分の人生を運営したいと思っていたが、そうであれば会うこともなかった人たちの要素が人生に入り込むと、その意味不明さが面白く心地いい。年を重ねてそう思えるようになった。

久しぶりに村上春樹訳の「グレート・ギャツビー」の本を引っ張り出してみると、物語を締めくくる文章に目が留まった。「だからこそ我々は前へ進み続けるのだ。流れに逆らうボートのように、絶え間なく過去へと押し戻されながらも」。以前も別のエッセイで引用した記憶があるが、その頃は「いやあ、名文だなあ」くらいの感覚で、実感としては理解できず、やはり前に進むのが怖かった。だが今なら、我々を過去に押し返す濁流の力強さやボートのオールを握る両手の痛み、それでも進んだ後に見える、思ってもみない景色の美しさが心から分かる気がする。



「旅行先の北海道野付半島にて」

くうねるところ

衣笠 美希
（フランス文学専修・2017年卒）

段ボールの山が作業を急かしてくる。ただでさえ狭い部屋がさらに圧迫される。私は今、人生で六度目、大学を卒業してからは三度目になる引っ越しの準備をしている。特に転職や異動といった理由はなく、ただ気まぐれに部屋を移ること三回。そろそろ趣味の欄に引っ越しと書いてもいいような気がしてきた。

住まいを変えるという行為はどうにもエネルギーを消費するが、その家で過ごしてきた日々の記憶を、底から攫うような作業でもあると思う。一目惚れで買い集めた物、誰かにもらった物、好きではないけれど必要に迫られて持ち続けている物。そんな物たちを一つひとつ、しまい込んでいる棚から引っ張り出しては、仕分けをして箱に詰めていく。

もしかしたら、それは過去の清算とも呼べるのかもしれない。そんな作業の中、ふと自分の現在についても考えを巡らせてみる。

卒業からちょうど十年。フランス文学とは一切結びつかない仕事に当初は戸惑ったものの、時折生じる無茶ぶりや緊急事態に慌てふためきながら、社会人としてはなんとかこなせるようになってきた（と信じている）。

人前では可能な限りきちんとした人物を装ってみるし、名刺には真面目そうな文字が並んでいる。それでもいい大人と呼ばれる年齢になってさえ、相変わらず失敗はあって、例えば新居で使うカーテンを注文し忘れてしまい、引っ越し後二週間ほどは開放的すぎる眺望を楽しむことが確定していたり、インターネット回線の申し込みを後回しにして、先日入居の1ヶ月後に工事日が確定したと連絡をもらって、慌ててWi-Fi レンタルを追加でお願いしたり。どうにも思うように進まないことがたくさんある。

周囲では昇進だ転職だという仕事の話や、結婚だ出産だという家庭の話まで、人によって様々な状況でそれぞれが違う選択をして別の道に進んでいく。その背中を見送りながら、終わりの見えない段ボールの山に囲まれた自分は、果たしてこれでいいのだろうか。まるで足元の泥に捕まってしまったような気がしてくる。



そんな時こそ、本のページをめくる。

学生時代に読んでいた本、展覧会の図録、最近買った小説、お気に入りのレシピ本。周囲にファムファタルもオムファタルもいないし、理想を追い求めて破滅する偏屈な貴族もいない。美しい景色はあるかもしれないけれど、それに感動して足を止めるほどの余裕はなく、手の込んだ料理よりも効率を重視した食事をとる回数の方がずっと多い。

それでも、どこか遠くに感じる世界が、日々を生きる自分にとっては緊急脱出口のように、重くのしかかる現実からするりと抜け出す手助けをしてくれる。そして実際に、展覧会や映画館、珍しい調味料を扱う輸入食品店なんかに、私の足を向けてくれるのだ。

おそらく私は過去に生かされている。楽しかった記憶をたどって、その残り香を道しるべに、先へと進む手助けにしている。世間で言われる成功や正解からは外れていたり、周回遅れかもしれないが、振り返ってみると、これはこれで悪くないかなと思えてくる。

文学部で学んだことが人生において直接役に立つかと言われると、正直なところ全く役には立っていない。けれど、これだけ慌ただしく変化していく世の中で、押し寄せる現実の波に窒息せずに毎日をそれなりに楽しく過ごせるのは、間違いなく文学部での日々があったからだと思う。



これからも食う寝るところに「めくる」を加えて、それが私の人生を支えてくれるはず。

ひとまず新居でも好きな本が好きに読めるように祈りつつ、本棚の整理から再開しよう。

私の松江での研究生活

芦田 耕一
（国文学専攻・1969年卒、1973年修士課程修了）

私が神戸大学文学部に入学したのは1965年です。一年半の教養部のあと、専門課程に進学することになります。当初から国文学を専攻する希望でしたが、大きな関門が待ち構えていました。文学部の入学定員は90名でしたが、各専攻に収容限度数なるものがあり、国文学専攻は15名です。希望者は18名だったと思いますが、幸いにも望が叶いました。

専門の授業は楽しく、さらに究めたく思いましたが、運よく1968年に大学院文学研究科（修士課程）が設置されました。これには先生方が随分苦労されたと聞いています。国文学専攻には永積安明、島田勇雄、猪野謙二の錚々たる先生方に加えて、藤岡忠美、野口武彦の両先生が赴任されました。私は平安時代の文学を卒業論文にしたいと思っており、藤岡先生のご専門分野ですのでこれで決まりました。

1968年夏ごろから学園紛争の兆しがありました。9月には大学院入試があり（当時は2月と9月にありました）、口頭試問での卒業論文については『源氏物語』の話をしましたのでその頃から考えていたのでしょう。卒論は『源氏物語』のいわゆる宇治を舞台とする「宇治十帖」の女主人公大君（おおいぎみ）を取り上げました。「まめ」な男薫との親も認める結婚さえも拒否する女性ですが、これは作者の結婚観が反映されているのではないかというように結論づけました。光源氏は所詮狂言回しでしかなく、『源氏物語』は女の女による女のための作品なのです。紛争の関係で卒論の口頭試問はありませんでした。

大学院2期生として入学しましたが、当初は紛争の余波が続き、さらに先生方の4年おりなさいという進言もあり（博士課程設置の可能性があったのでしょうか）、結局4年で修了しました。実は3年目から大阪府立高校全日制の教諭となっていました。修士論文は権勢家の前途有為の男藤原高光が妻子を残して二十余歳で比叡山に出家する話で、残された妻などの悲しみを記した『多武峰少将物語』というマイナーな作品を取り上げました。詳細は割愛しますが、後に手を入れた論文が「平安文学研究」や「國語と國文学」に掲載されました。





高校教員を6年間勤めたあと、藤岡先生の御推薦をいただき、1978年に島根大学法文学部に常勤講師として赴任し、松江の地と島根大学がすっかり気にいり、65歳の定年まで実に33年間（天文学的数字）も勤めました。故地に帰った今も懐かしく思い出しています。

私のライフワークとなった一つは、「百人一首」の84番歌「ながらへば又このごろやしのばれん憂しと見し世ぞ今は恋しき」作者の藤原清輔（1108～77年）の研究です。彼の代表的な著作に「歌学の宝庫」と名付けてもよい『袋草紙』があり、大学院の藤岡先生の演習で一部取り上げられていましたが、本にする目的で、同期の西村加代子さん（元神戸学院女子短期大学教授、50歳で長逝）、3期下の中村康夫さん（国文学研究資料館名誉教授）と一緒に休日等に合宿を重ね、『袋草紙考証歌学篇』（1983年）と『袋草紙考証雑談篇』（1991年）を世に問うことができました。藤岡先生校注の新日本古典文学大系の『袋草紙』に貢献することができたと自負しています。私はこれと並行して清輔の詠歌等の研究を進め、二〇〇四年に『六条藤家清輔の研究』、二〇〇八年に『清輔集新注』を上梓しました。

今一つは、地方大学に課せられた地域貢献として「出雲歌壇の研究」に取り組んだことです。出雲は荒神谷遺跡から銅剣等が一所から多く出土し脚光を浴びましたが、他にも『出雲国風土記』が「風土記」として唯一完本として残り、そして地元の人もあまり知りませんが、和歌発祥の地なのです。出雲大社の神官や社家が中心になった「歌壇」が生まれ、多くの歌が詠まれました。地元大社の豪商手銭（てぜん）家等に実に多くの歌集や句集が残されています。手銭家蔵書本や架蔵本を資料に二〇一二年に『江戸時代の出雲歌壇』を出版しました。

恵まれた環境のもと、楽しい学究生活を送ることができたことに感謝しています。

「文窓会」の魅力溢れる先輩たち

西川 京子
（西洋史学専攻・1969年卒）

大学4年生の後半は、大学紛争で文学部も封鎖され、講義も卒業式もなく、昭和44年（1969年）3月、大学から放り出された。卒業後も同窓会への興味など皆無だった。

それなのになぜ20年近くも同窓会に係わることになったのか？ある先輩、日高氏との出会いがきっかけだ。

60歳の頃、日本香港協会が主催する旧正月の晩餐会に出席した時だった。香港に11年間駐在し、帰国後も香港・中国への進出アドバイスの仕事についていた。

30代半ばで離婚後公認会計士になった私は、多くの日系企業が進出していた香港に駐在した。学生時代、英国帝国主義が卒論のテーマだった私は、「中国へ返還後、『一国二制度』をとる香港の運命や如何に？」、英国の植民地・香港の行方に野次馬的興味を持った。

旧正月の晩餐会場は、赤や黄金で華やかに飾り付けられ、二胡の演奏が流れていた。

円卓の隣に座った男性は話題が豊富で面白い。話している間に同窓、それも文学部卒だと分かり互いに驚いた。文学部の同窓会、「文窓会」の活動に深く関わっているようだ。

「文窓に関わってる俺の友人を紹介するよ」、当然のように、日高氏は次のアポを決めた。

次の週、北の新地の店で紹介されたのは、鞍井氏だ。元電通のクリエーターだった二人は私の知るビジネスマンたちとは少し違っていた。発想が自由で、楽しみながら仕事をしていた様子が伝わってきた。上場前の電通は、きっとそれほど管理が厳しくなかったのだろう。

すぐに二人の先輩に引き付けられた。

日高氏からまた連絡があった、「もう一人、次期会長を紹介するよ、僕らの押しの人や」。

三宮のビアホール、ミュンヘンで、フライドポテトとから揚げをつまみ、ジョッキ片手に話は盛り上がった。次期会長、池上さんは、知的で凛とした麗しい女性だった。

こうして私は、「文窓会」の活動に足を踏み入れることになった。

日高氏と鞍井氏、二人の個性は大きく異なる。日高氏は、ルールなどおかまいなしの「いたずら坊主」。鞍井氏は、一見厳しい印象を受けるが、知的でダンディーな紳士だ。酒好きは同じだが、飲む場所が違う。日高氏は賑やかなビアガーデンが好き。鞍井氏は、カラオケなどない、静かなカウンターのバーがお気に入りだった。鞍井氏の行きつけのバーでは、日高氏は敬遠される、「すいません、お客様、もう少し声のトーンを落としてくださいますか」。



敏馬神社の元宮司、花木氏を加え、9期の三人組は、互いの違いを認め、かつ尊重し合っていた。いい友情で結ばれていると、うらやましかった。

文学部のみならず神戸大学を愛した池上さんの会長就任で、「文窓会」がいっそう活気づいたようだ。「花の9回生トリオ」に新会長、我々新しい役員たちも加わり熱心に討議し、酒を飲み、色々語った。

「卒業生には卒業パーティーがある。新入生にもなんか作ったらどうかな？」

日高氏の発案で、新入生歓迎茶会が始まった。「これから何を学ぶか？」、新入生が各科の教員たちに質問・疑問をなげかける。合間に、お菓子をつまみ、お茶で喉をうるおす。あちこちのブースで、話が盛り上がる。

学生レポートコンクール「文窓賞」は、文学部側の要望・「覇気に欠ける学生を活気づける何か、ありませんか？」に応えて鞍井氏たちが企画したものだそうだ。

仕事柄、ビジネスばかりに目が向いていたが、文窓役員や教員たちと接することで、文学部の学問の広さや深さに、そして、それが、効率性や功利性を追い求め、混沌として先の見えない今の世界にとても重要なことも気づいた。文窓会との出会いに乾杯・感謝だ！



〔シリーズご寄稿・第9回〕

「軽やかな積み重ねが拓くこれから」

赤羽 佳奈子
信濃毎日新聞株式会社
（国文学専修・2017年度卒）

昨年9月、公益財団法人日中友好会館（東京）が主催し、長野県日中友好協会の協力で企画された「長野県高校生文化訪中団」に同行した。書道パフォーマンスと吹奏楽を通じた芸術・文化交流が目的で、県内2校の生徒約50人が団員として参加。1週間の日程で北京や河北省に滞在した。長野県は国内最多の満蒙開拓団を送り出すなど、歴史的に中国と深い繋がりがある。長野県日中友好協会は国交正常化前から民間の交流を続けており、これまでの実績を背景に長野県が選ばれたという。

滞在中は現地の子どもたちとの交流の他、万里の長城や紫禁城といった世界遺産、河北省の新都市「雄安新区」を見学した。昨年は戦後80年の節目にあたり、訪中の直前には旧日本軍の731部隊を題材にした映画の一般公開が始まるなど、対日感情の悪化を懸念する報道が出ていた時期だった。不安を抱きながら参加した生徒もいたが、道具や準備時間などの環境が万全でない中、堂々たる演奏と書道パフォーマンスを披露した。現地の生徒たちは一生懸命に日本語でコミュニケーションを取ろうと話しかけ、日本のアニメの話題や学校生活の話で盛り上がっていた。短い時間ではあったが、生徒たちが会話を楽しむ様子を必死に写真に収めながら、一人一人の出会いが国家間の関係や歴史を越えていくものになり得るのだという感慨を覚えた。

訪中の最終日、空港に向かう早朝のバスの中で、現地の受け入れ機関の女性が「どんな国にも良いところと改善すべきところがある。皆さんが実際に中国を訪れ、自分の目で見て感じたことを大切にしてほしい」と語りかけた言葉が心に残っている。実際に、帰ってきた生徒たちに感想を聞くと「みんな優しかった」「印象が変わった」と話してくれた。

帰国してまもなく、台湾有事を巡る首相答弁がきっかけとなり、日中関係は悪化した。訪中団の生徒たちや、あのとき接した中国の人たちは今、どう考えているだろうか。

今回の寄稿にあたり、「国際交流」や「異文化理解」という文脈において、「最初は不安だったが、実際に触れてみることで理解が深まった」という内容にするのはあまりに安直かとも思った。それでも今回、高校生の瞬間ごとの表情や、プラスだけではない素直な反応を間近で見ることによって、そうした体験の積み重ねこそが新しい歴史を拓いていくということを実感できた。ある国のことを考える時に、顔が浮かぶ人や知っている景色の存在があるだけで、温度が違う気がする。今は制限もあるが、多くの人が交流の体験を得られるよう、長い歴史の中で着実に関係を築いてきた民間の活動が続くことを願わずにはいられない。

今回の機会を得たことで、大学時代、初めて海外に出掛けたときのことを思い出した。できればなるべく家にいたいという気持ちで生活してきた私にはとてもハードルの高いものに思え、渡航の前に海外経験が豊富な友人に助言を求めた。そこで返ってきたのは「飛行機に乗っていたら着くから大丈夫だよ」という答えだった。彼女はふざけていたわけではなく、至って真剣だ。慣れ過ぎている彼女に尋ねたことが間違いだったと思ったものの、初めて着いた「外国」で思い出したのはその言葉で、本当にその通りだと思ったら確かに気持ちが軽くなった。

今でも事あるごとにあの言葉を思い出す。何もかも気負いすぎず、流れに任せれば上手くいくこともある。今回も私たちはどうしても交流の意義や成果を考えてしまうが、日本側の生徒も中国側の生徒も、ただ目の前の人を歓迎したい、話してみたいという思いで接していたから心温まる交流に映ったのだとも思った。「国際交流」の看板など背負わなくても、軽やかなコミュニケーションの積み重ねが大きな何かを変えるかもしれない。そのための種蒔きまでもが失われることのない世の中であってほしいと思った。



令和７年度（2025年度）卒業・修了祝賀会開催

2026年3月25日（水）午後３時からLANS BOXの２階ホールで、文窓会主催の卒業・修了祝賀会が開催されました。

当日の午前中はポートアイランドホール（ワールド記念ホール）での学位記授与式があり、卒業生・修了生たちは各専修での学位記授与のため六甲の学舎へと小雨の中移動しましたので、空腹の人も多かったことでしょう。

祝賀パーティでは、白鳥文学部長、武藤文窓会会長のお祝いの言葉に始まり、奥村沙矢香学生部長の乾杯の発声とともに歓談の楽しいひと時が繰り広げられました。

抽選会では、入場順の番号のくじが当たった人へのプレゼントがあり、大盛り上がりでした。景品は今年も梅村先生が神大グッズの中から選んでくれたものでした。

今年は95名の卒業生・修了生が参加しましたが、教室での別れを惜しむ時間が長かったとみられ、午後4時過ぎの抽選会に急いで入場する姿も見られました。







2025年度卒業生アンケート

あなたが、神戸大学文学部での学びで得た最大のものとは何でしょう?

＊（　）は専修、卒論：は卒論のテーマ

●「当たり前」とされている物事を見つめ直そうとする姿勢。言語学では、ふだんから当たり前のように使っている言葉・音声の構造に切り込んでいく。そうすることで、ただ何となく使っているだけでは分からない原理が見えてきて「面白い！」と思える。（言語学 / 卒論：温度を表す日本語オノマトペの音象徴について）

●学ぶことで他者の苦しみや痛みに対する想像力を膨らますことが、ほんの少しだけできるようになるのかもしれないと同時に、他者に容易に共感することは暴力的でもあるということ。（英米文学 / 卒論：日系アメリカ人三世女性作家の文学）

●教員免許を取るために、哲学や社会学などの専攻とは関係のない授業を履修したことで、幅広い分野の知識やそれによる様々な価値観を身につけることができた。また、苦手な内容の講義も頑張って乗りこえたことで、忍耐力が身についたと感じられる。（東洋史学 / 卒論：『ハヤーティ史』におけるシャー・イスマーイール）

●卒業論文は、一次資料の言語として「アラビア語」を履修した。まだまだ未熟であるが、アラビア語を母国語とする地域の文化に僅かながら触れることができ、多文化理解およびこれからの異文化との接触に対する主体的な態度も涵養することができた。（東洋史学 / 卒論：シャアラーニー『大列伝』に見えるマジュズーブ）

●言葉の意味に厳格になる姿勢と、その意味がどのような状況で発されたものか、背景も思慮を行きとどかせて考える力を得られたことが本学部での最大の学びである。留学生との交流、史料の読解、授業内外での教員、学生とのコミュニケーション、旅行先での会話を通じて得られたもので、特に外国語（中国語、英語、広東語、ある意味では関西弁）を用いた言語活動に抵抗がなくなったことは、自分にとって非常に有意義であった。（東洋史学 / 卒論：宋末元初江南士大夫の活動と交遊）

●他者の立場を想像し、人を思いやること。様々な小説や詩に触れ、大学生活や留学を通して人と接するなかで、一見自分とは遠い存在のように思える人に対しても想像力を働かせて相手の立場に立ち、物事を考えること。（フランス文学 / 卒論：ジャン・ジュネ研究）

●広い視野をもって物事を考えようとする習慣。対象の一面だけに捉われず、様々な物事の関係を考慮に入れて理解しようとすること。（ヨーロッパ文学 / 卒論：ローラン・ビネの歴史小説について）

●あきらめず学び続ける力。（東洋史学 / 卒論：文革以前の中国における文芸批判）

令和8年度 新入生歓迎会（2026年4月8日）　文学部学生ホール

満開の桜を眺めつつ、新入生たちが「情報基礎」の授業後、梅村先生に導かれて文学部学生ホールへやって来ました。新入生歓迎会は、近年授業初日の必修授業後に毎年同窓会主催で開催されています。

歓迎会は、武藤文窓会会長の挨拶、白鳥文学部長の挨拶、続いて文窓賞募集案内、各専修担当教員の紹介という流れで始まりました。その後、新入生たちは、お菓子とお茶で歓談し緊張が少しほぐれたところで、思い思いの専修ブースを訪ねるという企画でした。歓迎会は、



卒業・修了記念パーティ同様、梅村先生の司会により、スムーズに進行しました。

専修をまだ決めかねている新入生にとっては、全専修ブースの教員や上級生、大学院生たちによる各専修紹介は大変有意義な機会だったと思われます。新入生たちは、一つだけではなくいくつもの専修ブースを回って熱心に聞き入っていました。



当日回収した新入生たちの入学直後のアンケートの一部を掲載しますので、ぜひご一読ください。

2026年度新入生アンケート

入学式記念講演～森岡毅氏（株式会社刀代表取締役CEO）による「Harder Right」を聞いての感想

●「Harder Right」、すなわちより難しいと思われる方の選択をしたほうがよい結果として正しいしよいと思われるようになった経緯が丁寧に語られていて、とても共感できる素晴らしい講演でした。阪神・淡路震災を体験から「生き急ぐ」ようになったという言い回しが的を射たものだと思いました。

●「迷う時点で、その選択肢はできること」という言葉に胸を打たれた。講演を聞きながら、今までの自分の人生が自然と想起された。どちらかというと自分は“easy right”で生きてきたが、そうした生き方を続ける中で、段々と選択肢が狭まり、これからの未来が窮するような感覚があったので、今この時点でこの講演を拝聴できたことは、自分にとって非常に意味があったと強く実感している。

●阪神淡路大震災の体験談が印象的だった。テレビやドキュメンタリーでは分からなかった震災で身近な人を失った体験談を聞くのははじめてで、真に迫るものがあった。ジャングリアやネスタリゾートの開発も世間的に疑問や批判が多いかもしれないが、それも森岡さんにとって、「Harder」な選択肢を選んだ結果なのかなと思った。

●親から離れて全て自分で決めて生きていかなければならない不安でつぶれそうになった私の背中をおしてくれた講演だったと思います。これから直面するであろう苦しみや焦りは間違いの結果ではないのだと、新しい挑戦に向かう勇気をもらえました。

● Harder Right の精神に感銘を受けました。生きている、生きることができているうちは死なない程度に頑張るべきですね。伝えたい想いも叶えたい願いも、生きている限りは可能性がある。

大学生としてこれから何を学び、何をやってみたいと考えていますか?

●生まれてから、小・中・高と敷かれたレールの上を辿るような人生を送って参りました。しかしながら、大学生になった今、そのレールは自分自身で敷いていかなければなりません。悪く言えばお先真っ暗、しかし良く言えば無限大の可能性に満ちあふれています。私は、心理学や社会学を学びたいと思い、文学部に進学しましたが、それ以外にも興味を持った学問も多くあります。「自分は心理学を志望しているから…」という心持ちではなく、興味・関心の趣くままに様々な分野・物事を横断しながら、常に成長の兆しの見える方向に歩んでいこうと思っています。

●型のある基礎を重視する高校の学習から自由で専門性のある大学の学習に変わる中で、能動的に探究していこうと考えています。特に興味のある分野を、大学では自由に学ぶことができるので、没頭するくらいの熱量でその分野を深めていきたいです。

●専門科目だけでなく教養科目にも興味を持って積極的に取り組みたい。教養科目の時間割を見たとき、文系でも数学や医学を受講できるのかととても嬉しく感じた。様々な学問を体験できるという機会を最大限活用して、自分の知的好奇心を刺激できる4年間にしたい。

●現在、美術史学を学び人生を豊かにしようという意志でいる。でも少し、海外や英米文学にも興味があります。課外では音楽系の部活に入り、仲間を増やしていきたい。また、地元を出てせっかく神戸に来たので、その独特の雰囲気をこの身で体感していこうと思います。

●現状、社会心理学に興味がありますが、一度様々な授業を受けてみてから考えようと思っています。実際どんなことをするのか知らずに名前だけで専修を決めるのは危険な気がするので、色んな授業を受けてみたいです。課外活動としては、中・高からやっている演劇を続けるか、落語という新しいジャンルに挑戦するかで悩んでいます。社会貢献になるようなこと（ボランティア等も）やってみたいです。

神戸オックスフォード日本学プログラム
KOJSP 第13期生修了発表会報告

厳しい暑さが続く8月4日、滝川記念会館にて行われた神戸オックスフォード日本学プログラム修了発表会は、2025年で13回目を迎えました。13期生9名による発表は、連日の暑さにも負けないほど熱く、そして内容の濃いものでした。

テーマは多岐にわたり、「琉球諸語」「日本語の形容詞」「会話における相槌」など言語に関するものから、「新興宗教」「ジャポニズム」「日本のフェミニズム」といった日本文化を扱うものまで、幅広く興味深い内容の発表が続きました。



修了式でのスピーチからは、日本の暑さや神戸の坂の多さに苦労しながらも、学びを楽しんだ様子が伝わってきました。学生のスピーチの中に「神戸大学はとてもいい大学」という言葉があり、お世辞だとしても卒業生の一人として嬉しい気持ちに。修了式に参加されていたホストファミリーとも楽しげに会話している様子を目にし、勉学だけでなく日本での生活も充実していたことが窺えました。



懇親会で一人の学生に日本語の学習方法を尋ねたところ、スマホの言語学習アプリを日常的に使って漢字や語彙を覚えているとのこと。身近なツールを活用しながら、自発的に学ぶ姿勢に刺激を受けました。

次回の修了式ではどんな発表に出会えるのか、今から楽しみです。

（報告　成田千紘）



文窓会（文学部同窓会）――会計報告――

令和７年度収支計算書（令和7年4月1日～令和8年3月31日）

		令和７年度	令和6年度(参考)
【収入の部】			
収入合計		**¥4,952,860**	**¥5,111,975**
	会費納入金	4,400,000	4,400,000
	協力金	544,000	669,000
	雑収入	8,860	42,975
【支出の部】			
支出合計		**¥4,130,273**	**¥3,698,993**
事業活動費		**¥3,096,976**	**¥2,709,212**
	会報費	1,477,961	1,400,418
	歓送迎会費	821,023	509,014
	文窓賞費	341,710	368,365
	ホームページ管理費	8,250	8,250
	総会費	332,032	307,165
	活動援助費	50,000	50,000
	名簿管理費	66,000	66,000
協力金費		**¥110,000**	**¥110,000**
	学術助成費	110,000	110,000
事務局費		**¥602,713**	**¥607,302**
	事務業務委託報酬	319,800	322,800
	家賃・水道光熱費	109,392	113,463
	通信費	69,548	62,115
	旅費交通費	87,220	76,770
	消耗品費	16,753	32,154
支払手数料（振込・振替料金）		**¥25,684**	**¥27,791**
会議費		**¥117,000**	**¥107,000**
渉外費		**¥177,900**	**¥137,688**
慶弔費		**¥0**	**¥0**
差引収支		**¥822,587**	**¥1,412,982**
前年度繰越金		**¥19,723,977**	**¥18,310,995**
差引収支		**¥822,587**	**¥1,412,982**
次年度繰越金		**¥20,546,564**	**¥19,723,977**

令和７年度財産目録（令和8年3月31日現在）

Ⅰ．資産の部		**¥20,546,564**
	現　金	44,708
	（ゆうちょ銀行）普通貯金	1,195,093
	（みなと銀行）普通預金	10,885
	（ゆうちょ銀行）振替口座	2,704,193
	（ゆうちょ銀行）定額貯金	6,004,575
	（みなと銀行）定期預金	1,009,555
	（みなと銀行）定期預金	1,510,308
	（みなと銀行）定期預金	8,067,247
Ⅱ．負債の部		**¥0**
Ⅲ．正味財産合計		**¥20,546,564**

事業年度に係る決算報告書を監査した結果、
適正であることを認めます。
令和8年5月13日

会計監査　　三　宅　征　彦　　印

会計監査　　中　畑　寛　之　　印

文窓会役員（2026年9月1日現在）

	名前	卒年・専攻
会長	武藤美也子	1968年卒・国文学
副会長	吉田　浩次	1968年卒・社会学
副会長	西川　京子	1969年卒・西洋史学
幹事長	廣野　幸夫	1968年卒・社会学
常任幹事	田中　睦子	1971年卒・芸術学
常任幹事	谷上　光晴	1976年卒・国文学
常任幹事	市澤　　哲	1983年卒・国史学
常任幹事	中川　伸子	1992年卒・哲学
常任幹事	成田　千紘	2007年卒・言語学
常任幹事	梅村　麦生	2009年卒・社会学
常任幹事	津田　　薫	2010年卒・フランス文学
会計監査	三宅　征彦	1966年卒・社会学
会計監査	中畑　寛之	2001年修・フランス文学
東京支部長	田中　　勉	1972年卒・国文学
東京支部　顧問	中野　　裕	1961年卒・英米文学

文窓会東京支部だより

文窓会東京支部では、新しい活動指針「気軽に参加でき、和やかで有意義な憩いの場の実現」に添ってイベントの内容充実、魅力度の向上に、鋭意、取り組んでおります。＜文学部卒業生皆さまのご来訪をお待ちしています＞

2026年度の東京支部活動

1　支部総会＆東京文窓人の集い（昼食懇親会）

開催日時　2026年05月22日（金）10:30～12:00
支部総会を支部運営コアメンバー４名で開催
「支部会則＆運用細則」および新規活動指針等策定



2　文学部担当木曜会（講演会）

開催日時　2026年10月23日（金曜日）18:00～
講演骨子：高齢者の孤独、社会的孤立とその回避そして幸福、福利、自己肯定感と人生の充実感、社会との関連と健康への影響等
講　　師：神戸大学　片桐恵子 教授
神戸大学ウェルビーイング先端研究センター長
神戸大学大学院人間発達環境学研究科 教授
開催場所：（社）神戸大学東京六甲クラブ有楽町東京電気ビル南館地下１階（JR 有楽町駅徒歩約８分）℡ .03-3211-2916

神戸大学
文学部だより
No.24
KOBE UNIVERSITY
2026.10
発行：神戸大学文学部　　編集：『文学部だより』編集委員会

広島グローバル・アクティブ・ラーニングとそこから考えたこと

人文学研究科長・文学部長　白鳥　義彦

神戸大学文学部・人文学研究科では広島でのグローバル・アクティブ・ラーニングを毎年開講しており、私も何度か参加させていただいています。これは神戸オックスフォード日本学プログラム（KOJSP）が始まった後に、広島での学びの機会を設けようと嘉指信雄先生が発案され、前任の広島市立大学での教え子の方らの協力も得て始められたものと記憶しています。金曜の夕方に高速バスで広島に移動し、土曜日の午前に広島平和記念資料館の見学、午後にワークショップ、日曜日は各々広島でさらに自由に見学をした後に帰途につく、というのが毎年の大きな流れとなっています。土曜日午後のワークショップには広島の高校生や大学生も参加し、年によって被爆体験者のお話を直接聞く機会が設けられ、コーディネーターからの問題提起を受けてグループ・ディスカッションが行われ、最後には各グループからのまとめの発表が行われます。留学生、日本人学生各々からのそれぞれの体験を踏まえた様々な意見が出されて議論が展開し、充実した濃密な時間となっています。コーディネーターの方からも、広島の若者にとってもいろいろと考えるとても良い機会となっているとおっしゃっていただいています。島津製作所との共同事業開始後はその資金も活用して事前・事後学習を実施するようになり、さらに充実した内容となっています。私自身毎回新たな学びがありますが、前回参加した時には、第五福竜丸が被曝した 1954 年 3 月 1 日のビキニ環礁での水爆実験に「Bravo」という名前がつけられていたことを知り、衝撃を受けました。なおこの同じ 1954 年 3 月には、日本で最初の原子力研究開発予算が国会に提出されてもいて、この符合は非常に示唆的であると感じます。

このグローバル・アクティブ・ラーニングでは、平和とは、被害者と加害者、世界的な視点で物事をとらえること等、多くの論題が提起されますが、その一つに原爆や戦争についていかに伝え継承していくかという問いがあります。前回お話くださった被爆体験者の方も、自らの体験を語り始めるようになったのはずっと後年になってからのことだったとおっしゃっておられたのが印象的であると同時に、この体験を若い人たちに伝えたいという熱意が心に深く伝わりました。振り返ってみると、私は戦後約 20 年の生まれですが、幼い記憶の中に、戦争で手足を失くされた傷痍軍人の方々を街で見たことが刻まれています。また 1974 年の小野田少尉のルバング島からの帰国のニュースもリアルタイムで見聞きした記憶があります。「戦争を知らない子供たち」の歌が発表されたのは 1970 年ですが、深読みをすると、この時期にはまだ戦争の記憶がごく身近なものとしてあったからこそ、こうした歌が歌われたと言えるかもしれません。そう考えると、私の世代は、戦争を直接体験したわけではありませんが、しかしまだ戦争について生身で感じることができた世代だったと言えるでしょう。



学部長・研究科長をつとめ、いつの間にか若くはない側になってきているようですが、歴史の実相や体験をいかに伝え、継承していくかということは普遍的な課題であるように思います。またこの伝え、継承していくということにこそ、人文学の本質があると思います。



武士の「家」からみる近世日本

根本みなみ　講師

専門は日本近世史。主な業績として、「近世大名「御家」内部における「家」」（『歴史学研究』（1028）、2022 年）『毛利家－萩藩－』（吉川弘文館、2023 年）『近世大名家における「家」と「御家」－萩毛利家と一門家臣―』（清文堂出版、2018 年）など。

私の研究対象は、近世大名家における家臣、特に知行地を有する上級家臣の「家」です。近世社会では、「家」は社会を構成する最小単位でした。特に、「藩」と呼ばれる社会は大名を頂点に置きながらも、その運営は所属する家臣の「家」による分業によってなされており、必然的に家臣の「家」を存続させることが必要不可欠でした。藩は自分たちの生存を保証する上で、藩を構成し運営する家臣の「家」を、役負担に耐えられる形で存続させるために、財政的な支援や風紀粛清など近世を通じて物理的・精神的な働きかけを行っていきます。

同時に、武士の「家」は帰属する人々の生存を保証する集団でもありました。特に、上級家臣の場合、「家」に帰属するのは、直系家族だけではなく、陪臣などの非親族も含まれていました。彼らにとって、帰属する「家」の存続は、文字通り自身の生存と直結しており、だからこそ彼らは血縁のない主人の「家」存続に向けて、様々な行動を起こします。例えばその一つとして、陪臣たちが主人や他陪臣との不和を契機として、藩権力に主人の家政立て直しを要求した「出訴」という行為があります。一方、武士の「家」の本来的なあり方では、陪臣の統治といった問題は「家」内部で解決すべき問題であり、藩権力が無制限にその内部に介入することはまた別の争論を引き起こす可能性がありました。このため、藩権力は家臣の面子を保ちつつ、「家」が存続できるように、バランスを模索しながら対応を検討しており、ここに法制度だけでは把握しきれない、「家」をとりまく柔軟な対応の一端をみることができます。

一方、「家」という枠組みに焦点をあてると、見えてくるのは女性の発言や行動が持つ影響力です。聟養子という選択肢を有する日本の「家」では、聟を取る女性たちは自身が血筋継承という点で役割を担うことを意識し、養子の選択といった場面で積極的に発言を行いました。

このように「家」の存続をめぐっては、当主によって担われる藩政の場面ではなかなか見ることができない、女性や陪臣の役割や行動を見ることができるという点が、私がこのテーマに関心を持つ大きな理由です。



音声に宿る、ことば以上のもの

波多野博顕　講師

専門は音声科学、音声コミュニケーション、応用言語学。主な業績として、「日本語学習者による韻律の典型的特徴について－母語別にみた疑問発話と非疑問発話の比較－」（林良子編『日本語韻律の音声的特徴とその習得』ひつじ書房，2026 年）、“Which One Sounds More Human-like? -Comparison of Synthetic Speech Trained on Japanese Daily Conversational Data with and without Disfluency”（共著，『自然言語処理』33 (1), 2026 年）など。

ことばを「音声」として捉える学問がある―そのことを初めて知ったのは、私が大学生になったばかりの頃でした。言語音声を、どの言語表記にも依存しない IPA（International Phonetic Alphabet）によって表すことができると知り、その整然とした記号体系に衝撃を受けると同時に、「おもしろい」と強く感じたことを覚えています。それ以来、私の研究における関心は、一貫して音声という現象をめぐって展開してきました。

一口に音声研究といっても、その対象や方法は多岐にわたります。私は主に、観測に基づく実データを用いて、調音的（声道でどのように音が作られるのか）・音響的（言語音にどのような物理的特徴が含まれているのか）側面から分析してきました。例えば、MRI（磁気共鳴画像撮像法）で撮影された声道画像から、母音や子音を発音する際の調音器官をトレースし、母語による違いを検証したことがあります。また、日常会話に現れる質問発話に注目し、質問の種類によって韻律がどのように異なるのかを類型化しようと試みました。

日本語教育にも携わっているため、日本語学習者の音声にも関心を持っています。学習者の発話には、母語話者とは異なる音声的特徴が現れることがあります。それは単に「正しい／正しくない」という問題にとどまらず、言い方によってはネガティブにも聞こえてしまうことがあるように、聞き手に与える印象という問題にも関わります。このように、文字に書き起こすと失われてしまう話し言葉特有の情報は、私にとって重要な研究課題です。

近年は、こうした音声研究を日本語教育や音声情報処理へ応用することも視野に入れています。機械学習の手法を用いて日本語アクセント型を自動判定するツールの作成を検討したり、日本語学習者の韻律的特徴をモデル化したりする研究もその一つです。

音声は発したそばから消えていく、揮発しやすく脆弱な媒体のように見えます。しかし、その一瞬の声の中には、話者の意図、態度、感情、さらには年齢や性別、話し方の個性など、実に多くの情報が含まれています。私は、そうした声に宿る小さな手がかりを地道に分析することで、音声コミュニケーションの一端を明らかにしていきたいと考えています。

研究最前線 FRONT LINE



文のかたちから、意味の表し方を考える

曠景明　助教

専門は言語学。主な業績として、「日本語と中国語における動作主の脱焦点化の構文類型研究―受身文・目的語主題化構文・脱使役化構文の対照分析―」（『言語の類型的特徴対照研究会論集』8、2025 年 12 月）、「使役交替の柔軟性と統語構造」（『日本語学研究』84、2025 年 6 月）など。

専門は言語学です。とくに、文のかたちと意味・情報の表し方との関係について研究しています。複数の言語に見られる構文を比べながら、私たちが出来事をどう捉え、それを文としてどう組み立てているのかを考えています。

私たちは何かを伝えるとき、ただ語を並べているわけではありません。同じ出来事でも、どこに注目するかによって文のかたちは変わります。たとえば、窓が開くという出来事について、「誰かが窓を開けた」と言えば、動作をした人に焦点が当たります。一方で、「窓が開いた」「窓が開けられた」と言えば、動作をした人を前面に出さず、窓の状態や結果を中心に述べることができます。

一見すると、これは小さな表現上の違いに見えるかもしれません。しかし、そこには、話し手が出来事のどの側面に注目し、聞き手にどの情報を示そうとしているのかが関わっています。動作主を明示するのか、動作主を前面に出さずに結果や状態を中心に述べるのかという違いを比べることで、各言語における文の組み立て方や情報の示し方を考える手がかりになります。

これまでは、異なる言語に見られる構文を対照し、その共通点と相違点を分析してきました。なかでも、動作主が文中に示されるかどうか、出来事の結果や状態がどのように表されるかに注目しています。なぜ同じ出来事でも、言語によって異なる表現方略が選ばれるのか。その背景にある認知的・言語的要因を明らかにすることが、大きな関心の一つです。

このような対照の視点は、外国語学習や言語教育にも関わります。学習者にとって難しいのは、文法規則を覚えることだけではありません。母語では自然な文のかたちが、学習対象の言語では不自然になったり、動作主や結果状態の示し方が母語と異なったりすることがあります。そのため、言語を比較する視点は、母語との違いから生じる理解や運用上の困難を捉えるうえでも有用です。

文法は、単なる規則の集まりではなく、話し手による出来事の捉え方を映し出す仕組みでもあります。今後も、個別言語の記述や対照研究を基盤としながら、文構造と意味・情報構造の関係を考察し、話し手が出来事を言語によってどのように表現しているのかという、より一般的な言語のしくみの解明につなげていきたいと考えています。

最近の著作から RECENT BOOKS

ティム・モードリン（ジミー・エイムズ監訳、谷村省吾解説）『物理学の哲学入門Ⅰ：空間と時間』
勁草書房　2025年9月



「物理学の哲学」といえば、科学哲学のサブ分野の一つであり、英語圏ではそれなりの研究の蓄積があるが、日本ではまだまだ馴染みが薄い。本書は、この分野の第一人者によって書かれた入門書である（全二巻）。第一巻では、現代の標準的な時空理論である相対性理論を中心に、空間と時間にまつわる哲学的問題が論じられる。入門書にありがちな「中立的」なスタンスを取らず、あえて著者自身の見解を前面に出した論争的なスタイルで書かれているのが特徴。（ジミー・エイムズ）

Elisa Bolchi, Maria Rita Drumond Viana, Alice Davis Keane, Monica Latham, Sayaka Okumura, Mine Özyurt Kılıç (eds.), *The Edinburgh Companion to Virginia Woolf and Transnational Perspectives,*　Edinbugrh University Press　2025年9月



本書は、初刊から 100 年を経た現在も世界中で愛読され続けるヴァージニア・ウルフ作品の受容の実態を、世界各国のウルフ研究者が論じたエッセイ集である。各国のウルフ受容史、現代作家へのウルフの影響、最新のウルフ批評を扱う 3 つのパートを通して、ウルフ研究の「今」を力強く焙り出している。執筆者・編者ともに多国籍な顔ぶれから成る本書は、分断の世の中に対する連帯への、文学研究者の呼びかけでもある。（奥村沙矢香）

日本ヴァージニア・ウルフ協会、松永典子、松宮園子、伊藤節、浦野郁、奥村沙矢香、酒井祐輔、原田洋海、山本妙編『キーワードで読むヴァージニア・ウルフ――作品も作家もこの一冊で！』　小鳥遊書房　2025年9月



ヴァージニア・ウルフの愛読者が多い日本。しかし、気軽に手に取ることのできるウルフ入門書は未だなきに等しい。本書はこの状況を打開すべく、日本ウルフ協会が企画・編集した「ウルフ小百科」である。しかし、A to Z 形式の百科とは異なり、本書はウルフの作品と関連人物・用語を執筆者各々が独自の視点から論じた読み物である。ウルフに限らず 20 世紀初頭の英国社会・文化一般に関心を寄せる読者の知的好奇心を大いに刺激するはずである。（奥村沙矢香）

RECENT BOOKS 最近の著作から

長村裕佳子・坪谷美欧子・蘭信三編
『多文化共生と民族的マイノリティ：近現代日本をめぐる「人の移動」の歴史から』 明石書店 2025年6月



本書は、近年、日本社会に増えつつある海外からの様々な移住者がどのような思いで移動し、どうような生活を送って来たのかを、その歴史や社会背景をよりよく知るための情報を提示することを目的として刊行された。各章では在日コリアン女性、中華民国（台湾）系華僑、アメラジアン、フィリピン系日系人、中国帰国者などを取り上げ、戦後日本の多文化共生の議論に歴史を振り返る視点を提供した。（岡野翔太）

池上俊一・河原温編『聖人崇敬の歴史』 名古屋大学出版会 2025年6月



守護聖人、疫病除け聖人から、聖女や子ども聖人まで、なぜ一神教のもとで多数の聖人が求められたのか。殉教者崇敬に端を発し、聖地巡礼や列聖制度、宣教の進展とともに花開いた聖人崇敬の歴史を、東方諸教会、アジア・アメリカ・アフリカを含む世界的拡がりの中で初めて一望し、その複雑な役割を浮き彫りにした。私は論文「顕現する聖母マリア」で、中世から現代まで世界各地に聖母が出現したことの意味と聖母崇敬の心性史について論じた。（宮下規久朗）

宮下規久朗著『戦争の美術史』 岩波書店 2025年11月



本書は、2023 年に文学部で行った講義「戦争と美術」に基づくが、学生時代から長年温めてきたテーマであり、戦後 80 年に当たる年に刊行した。古代シュメールから現在のウクライナ戦争まで、5 千年にわたる戦争と美術との関係について考察し、とくに日本の太平洋戦争中の戦争記録画や封印されたナチスの戦争画を美術史的に位置づけた。図版の大半をカラーにすることができた。幸い少なからぬ反響があり、多くのメディアで取り上げられた。（宮下規久朗）

山本秀行・渡邊真理香編『アメリカン・ミュージカルと文化表象』 小鳥遊書房 2025年10月



アメリカン・ミュージカルの構成要素、歴史、社会表象の解説、重要作品 47 選と、年表・基本文献リストもついて、鑑賞から研究まで読者の幅広いニーズに対応している。『ウエストサイド物語』『オペラ座の怪人』『フラワー・ドラム・ソング』『プロデューサーズ』『ネクスト・トゥ・ノーマル』『レント』など、人気作品、新作、日本であまり知られていない作品など幅広く言及していている。なお、共編者の渡邊真理香（中京大学教授）は本学大学院人文学研究科修了生。（山本秀行）

ニクラス・ルーマン（坂井晃介、梅村麦生、小山裕、井口暁、赤堀三郎、樋口あゆみ訳）
『ルーマン 組織と意思決定』上・下 勁草書房 2026年2月



本書はニクラス・ルーマンによる社会システム理論と組織研究の集大成として、晩年まで執筆が続けられ没後に刊行された。ルーマンはそこで組織を包括的にかつ組織が社会のなかでもつ独特の意義を捉えるために、意思決定が意思決定へと接続するオートポイエティック・システムとして描き出す。梅村は第 5 章「時間関係」、第 6 章「不確実性吸収」、第 7 章「意思決定前提」（以上上巻）、第 11 章「構造変動：改革のポエジーと進化のリアリティ」（以上下巻）の訳を担当した。（梅村麦生）

アレクシス・ド・トクヴィル（著）、富永茂樹（編監訳）、石井三記、稲永祐介、宇野重規、北垣徹、塩谷真由美、白鳥義彦、髙山裕二、前川真行、松本礼二、山室信一（訳）、『トクヴィル選集』
みすず書房 2025年11月



『アメリカのデモクラシー』『アンシァン・レジームとフランス革命』等で広く知られるフランスの政治思想家・法律家・政治家アレクシス・ド・トクヴィル（1805 − 59）について、演説・報告・論文（第一部）、旅行記（第二部）、書簡（第三部）を通じて、時代の中におけるその活動と思索の射程の深さと幅を浮き彫りにする訳選書である。19 世紀フランスに生きたトクヴィルの相貌があらためて明らかにされている。（白鳥義彦）

スレイマン・バシル・ディアニュ（廣田郷士訳）『アフリカ哲学のために―存在・時間・言語・政治』
青土社 2026年4月



セネガルを代表する哲学者の代表作の翻訳（原題は『学者のインク アフリカにおける哲学をめぐる考察』）。今日アフリカ大陸から哲学をなすことはどのような意味があるのか。存在・時間・言語・政治という関連しあう主題から、元来西洋的な学問であった〈哲学〉に対するアフリカ的貢献をもたらした、今日的意義の大きな著作。巻末にやや長めの解説と人名注を付し、アフリカ哲学に馴染みのない読者への理解の助けとなるよう心がけた。（廣田郷士）

最近の著作から RECENT BOOKS

Satoshi Hirota, *Aimé Césaire et Édouard Glissant. Habitation poétique aux Antilles (1930-1960),*
Classiques Garnier　2026年4月



カリブ海を代表するフランス語詩人エメ・セゼールとエドゥアール・グリッサンの二人の文学を対象とした研究書。空間（植生・環境・風景）と時間（過去・歴史・現在）の中に「詩的に住まう」所作から、彼らが脱植民地化の時代に果たした詩学による〈政治〉の形と、根づきから開かれへ至る二人の詩的言語生成の「連続性」を明らかにした。本書の出版は、神戸大学文学部・大学院人文学研究科創立 70 周年記 念事業出版助成による。（廣田郷士）

谷昌親・中村隆之（編）『異邦人のフランス語圏文学：立花英裕と「世界 - 文学」の想像力』
水声社　2025年6月



日本におけるフランス語圏文学研究を長らく牽引してきた立花英裕早稲田大学名誉教授のこれまでの論考と、同分野の研究者らの論文からなる、最新のフランス語圏文学研究の成果。カリブ海、ケベック、アフリカへと広がるフランス語圏文学の魅力を伝える一冊。廣田は「フランコフォニー」及び「世界文学」概念の批判的検討から、文学そのものが持ちうる「普遍性」と、作家個人のフランス語使用がもつ可能性とについて論じた。（廣田郷士）

Daniel Gutzmann and Katharina Turgay (eds.), *The Oxford Handbook of Expressivity,*
Oxford University Press　2025年12月



会話において私たちは、相手に事実を伝達するだけではなく、敬語、罵り語、話者指向的副詞（例：幸い）、文末助詞（例:よ、ね）等を用いて、話者の感情もしばしば表す。本書は言語の感情表出性について、統語論、意味論、語用論、言語心理学、言語哲学など多角的な観点から考察している。さらに後半では、感情表出表現の言語個別性についても論じられている。本書は感情表出の仕組みを知るうえで有益な一冊となるであろう。（澤田治）

濱田麻矢著　高尚、喬亜寧訳『少女中国　『女学生』的一百年』　生活･読書･新知三聯書店　2025年4月



2021 年に岩波書店から出版された単著の中国語訳。近代を迎え、学校という時限つきの楽園で高等教育を受けるようになった中国の少女たち。自己決定の希求、理想かつ強迫観念となった恋愛、そしてシスターフッド。野心を胸に自分の居場所を探して冒険した女学生の二〇世紀を、様々な小説から読み解きます。中国最大の読書サイト豆瓣で、2025 年ブックオブザイヤー７位（歴史文化分野）に選出されました。（濱田麻矢）

報　　告 REPORT

神戸雰囲気学研究所の近況

久山　雄甫

神戸雰囲気学研究所（通称 KOIAS）は、2022 年に人文学研究科の若手教員有志を中心として設立されました。分野横断と文化横断をモットーに、新学術領域「雰囲気学」の創出と展開を目指しています。以下では 2025 年度の活動内容を中心に近況をご紹介します。

各国の研究者と力を合わせて新領域を開拓する必要があることから、KOIAS では設立当初より国際研究ネットワークの拡充に努めてきました。「雰囲気」というテーマそのものに関心をもつ研究者は、新現象学、情動論、空間論などを中心として、世界的にみると実は少なくありませんが、これまで研究者間の交流は限定的でした。こうした課題を背景として、KOIAS は、2022 年のローマ・トル・ウェルガータ大学の研究グループ Atmospheric Spaces との協定締結にはじまり、2023 年にはダルムシュタット哲学実践研究所（ドイツ）、コンコルディア大学センス学研究所（カナダ）、コペル科学研究センター（スロベニア）と、2024 年にはロストック大学新現象学会（ドイツ）、中央研究院中國文哲研究所（台湾）と、2025 年にはフルミネンセ連邦大学 no.ar ラボ（ブラジル）と、2026 年にはラモン・リュイ大学ブランケルナ研究所（スペイン）、ニーム大学クローム・プロジェクト（フランス）と協定を結んで、これまで待望されてきた研究プラットフォームを整備してきました。

2024 年度からは KOIAS を中心とする研究グループが神戸大学「先端的異分野共創研究プロジェクト」に採択され、アメリカで比較文学・現代思想を中心に雰囲気と呼吸を研究してこられたアルベルト・パリシさんに KOIAS 特命助教としてご着任いただくことができました。2026 年 9 月末までの任期です。また、各分野で「雰囲気」を論じてこられた大御所である地理学者ユルゲン・ハッセさん（ドイツ）および文化学者ベン・ハイモアさん（イギリス）







にも、それぞれ数か月のあいだ神戸大学に研究滞在していただきました。講演会、ワークショップ、フィールドワーク、国際共著論文の執筆などを行い、ハッセさんとは震災後に整備された神戸市内の公園の「雰囲気」演出について、ハイモアさんとは谷崎潤一郎『陰影礼賛』を雰囲気論の切り口から再解釈する可能性について、議論を深めることができました。

2025 年度からは KOIAS を中心とするチームが JSPS 研究拠点形成事業（A 型）に採択され、さらに活発な国際共同研究を実施することが可能になりました。2025 年 6 月に本事業キックオフセミナーをスロベニアで開催し、継続的な協働体制の基盤を固めました。2025 年 9 月には「東アジア思想における雰囲気学の可能性」を検討するセミナーを神戸大学で開催しました。採択年度より、本事業の目玉として「KOIAS フェロー制度」を開始し、ブラジルからの長期フェローであるマニュエラ・サラザルさん受入をはじめ、若手研究者の派遣（2025 年度 3 名）と受入（2025 年度 8 名）を行っています。さらに、上述の国際研究ネットワークを基盤として、2026 年 9 月には雰囲気学の国際学会（SOFAS=Society for Atmospheric Studies）設立を予定しており、神戸での設立大会に向けて、現在さまざまな準備をすすめています。哲学、文学、芸術学、メディア論、地理学、建築学など、さまざまな雰囲気学的関心をもつ世界中の研究者によって、神戸大学をハブとした共同研究体制が構築されつつあります。AI や VR の時代における雰囲気経験の位置づけも喫緊の課題です。

出版物での成果のひとつに、Springer Nature 社の有力ジャーナル Sophia での特集号 Atmosphere and Breath in Cultural Diversity の出版（2026 年 6 月）があります。久山がゲストエディターを務めました。また、シカゴ大学を中心とする芸術系ジャーナル Venti でもコラボレーションが進んでおり、特集号 Cross-Cultural Atmospheric Studies が 2026 年度中に刊行される予定です。さらに雰囲気学ハンドブック（Springer）および呼吸学ハンドブック（Routledge）の刊行もあります。今後は英語だけでなく日本語での研究発信も実現していきたいと考えています。

島津製作所との共同事業では「島津・KOIAS レクチャー」を年 2 回、京都の島津製作所本社にて継続的に開催しています。また、2026 年 4 月には技術論と生態学における雰囲気論の可能性を探るシンポジウムをオランダのロッテルダム大学の研究グループと共催しました。その他、国内外での口頭発表、翻訳書や論文の公刊など、多くの成果がありました。詳しくは KOIAS ウェブサイトをご覧ください。雰囲気学の構想は神戸新聞や日本経済新聞でも大きく紹介されました。今後も活動の輪を広げていきたく思っています。関心を持ってくださった皆さん、ぜひ公開講演会などにお越しいただければ幸いです。

パリ大学ナンテール校との共同シンポジウム

大橋　完太郎

今年度のパリ大学ナンテール校との共同シンポジウムは 3 月 27 日に現地にて開催されました。人文学研究科からは留学中の者も加えた前期課程・後期課程の大学院生 4 名が口頭発表を行い、パリ大学からも博士課程学生 2 名が発表者として参加しました。多くの聴衆に恵まれ、活発な質疑も行き交い、国際的な学術研究を本格的に発表する貴重な機会となりました。

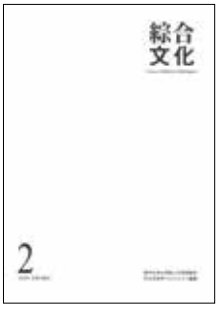


2025 年度の文化交渉学プロジェクト

田村　豪・梶尾　文武・梅村　麦生

人文学研究科人文学推進インスティテュートでは、学内の異分野共創研究ユニット「『文化交渉学』創出にむけた研究ユニット」（ユニットリーダー：梅村麦生）との共同で、「文化交渉学プロジェクト」を実施しています。同プロジェクトでは 2024 年度より、さまざまな専攻の大学院生らが研究報告を行う場としての「文化交渉学ワークショップ」を開催するとともに、同プロジェクトの成果を始め幅広い研究分野の学術論文を公刊する媒体として『綜合文化 Cross-Cultural Dialogues』（編集長：梶尾文武）を刊行しています。以下本誌の紹介と 2025 年度の成果を報告いたします。

『綜合文化』は 2025 年 3 月に創刊号、26 年 3 月に第 2 号が刊行されました。異文化交渉、異文化接触、複数文化に関係する論文を掲載の主眼とし、自由投稿論文のほか、翻訳をはじめ執筆者による特集企画の持ち込みを受け入れています。創刊号の特集は「植民地と帝国の文化」。第 2 号には「境界を越える／境界を生きる：日中における移動と社会適応の生活史」のほか 2 つの小特集（「「社会学的言い訳」批判と現代社会学の課題」・「「死の社会学」の再起動に向けて」）が収められました。翻訳では「金裕貞文学の翻訳」および「エミリアーノ・ブイス教授来日講演・報告集」



報　告 REPORT

の 2 つの翻訳企画が掲載されています。掲載論文は右の QR コードより閲覧可能です。

文化交渉学ワークショップにつきましては、2025 年 9 月 24 日・25 日に開催されました。24 日はオンラインにて小特集の報告が行われ、25 日は対面で 3 人が報告しました。各々の専門領域について報告が行われ、「文化交渉学」の名前に相応しく、触発されることの多い活発な議論が展開されました。報告者の院生の方々およびフロアから鋭く生産的な問いを提起してくださった皆様、ありがとうございました。

本誌では記述言語が日本語であるか否かを問いません。本学教員に限らず、大学院生や他大学の研究者にも開かれたジャーナルです。論文の採択にあたっては、専門家による厳正な査読を行っています。例年 9 月には投稿を希望する大学院生によるワークショップを開催しております。人文学の内部でも専門分化が進み、同じ研究科の院生同士でも距離が広がりつつあります。本プロジェクトがそうした現状にたいして微力ながら横糸を通し、個々の研究がより豊かに展開していくきっかけになるよう尽力したいと思います。



近　況 MESSAGES

神戸大学での日々を振り返って

安倍里美

私は 2021 年 10 月から 2026 年 3 月まで神戸大学に勤務しており、大学院では哲学コース倫理学専修に、学部では哲学専修に所属しておりました。

着任時はコロナ禍の最中で、遠隔での講義実施をしていたことを覚えています。全面的な対面での講義が開始されてからは、専修所属の学生としっかりと時間をとって議論することもできるようになり、私自身の専門領域に近いものを研究テーマに選ぶ指導学生も徐々に増えてきていたのを、密かに喜ばしく思っておりました。

着任期間中は、人文学推進インスティテュートの倫理創成プロジェクトと神戸雰囲気学研究所のメンバーとしても活動しておりました。いずれについても、分野横断的な議論が活発に交わされており、そこに参加できる機会をいただけたことを光栄に思っております。

現在は、南山大学人文学部人類文化学科で准教授として勤務しております。新しい環境で改めて、自分自身の研究課題に向き合いたいと考えております。

あの日の坂道から、歩みを重ねて

岡野靖子

はじめに、執筆の機会をいただきましたことにお礼申し上げます。私は 2023 年 4 月から 2026 年 3 月まで、文学部･人文学研究科で留学生担当講師として勤務しました。この 4 月からは、金沢大学で日本語クラスや多文化共修に携わっております。

神戸大学に着任した初日、大学へ続く坂道を登る学生たちの姿を目にし、日常がようやく戻り始めたのだと実感したときのことは、いまなお思い返されることの一つです。私の大学院生活は、COVID-19 の流行やいまも続くウクライナでの戦火で、世界が大きく揺らいだ時期と重なりました。博士課程修了に向けて一心に精進した 3 年間は、大学に通えたのは数回、また身近な人に生じた困難にも直面し、さまざまな感情を経験した期間でもありました。このような背景もあり、対面で対話できる日常が戻り始めることへの喜びと神戸大学で教育・研究に携わる機会をいただいたことへの感謝を感じながら、あの日私も坂道を登りました。

神戸大学で勤務した 3 年間は、主に国際共修や国際交流関連の行事に携わりました。講義では内容理解はもとより、互いの考えや価値観、言語・文化的側面も深く理解できるよう、対話の場を多く設けながら展開しました。行事では学内外の団体に加え、先生方のご協力のもと、専門性に裏打ちされた解説を交えた校外学習により、充実した学びも提供できました。講義や行事、委員会、産学連携事業を通じて、15 専修の先生方や学生の皆さん、事務の方々と交流できたことは、私にとって多角的な視座や新たな知見を得る貴重な機会になりました。文学部・人文学研究科で積んだ経験を糧に、またいつか皆様とお目にかかれる日を心待ちに、新たな環境で教育・研究活動に精進していく所存です。

この 3 年間に賜りましたご協力とおかけくださった温かなお言葉に改めてお礼申し上げます。文学部・人文学研究科の皆様との出会いに心より感謝申し上げますとともに、ますますのご清栄をお祈りいたします。

退職と長編小説

市澤哲

退職後の楽しみにしていたことの一つに、長編小説を存分に読むことがあった。分厚い小説を目にするたびに、これだけ紙幅を重ねて語られなくてはならないこととは何なのかという問いが沸き起こるのは、テクスト読みを習いとする者にとって当然のことである。しかし、のめり込む対象を見つけると、ほかの物事が手につかなくなるという悪癖が私にはある。それ故に在職中は長編小説を読むことを意図的に避けてきた。読みたいが読まないという禁を破る

時が、ようやく来たのである。
かくして、大西巨人『神聖喜劇』を読み始めた。ご存じの通り同書は日米開戦期に召集された東堂二等兵の目から、軍隊生活を描くという枠組みを持った作品である。登場人物の振る舞いの一つ一つに対して、主人公が想起するかつての読書や経験が分厚く語られ、なかなか話が進まない。まさに長編小説である。書籍の引用は古今東西にわたり、目の前の不可解が古典を通して理解され、古典の意味が眼前の不条理を通して明らかになる。また、人間同士のやりとりの中から浮かってくる先入観を裏切る人間の複雑さが、主人公のニヒリズムに揺さぶりをかける。思い描いていた退職後の至福の時間である。

と、ここまではよかったのだが、近所の公園にやって来た移動図書館の書棚に読みたかったエーコの『プラハの墓地』を見つけ、うかつにもその本を借りてしまった。かくして『神聖喜劇』第２巻末の「ええか、人間を踏みつけにしたこげな有様がこの先続きよったら、いまにみとってみろ、（中略）もっと恐ろしか大事があっちこっちに持ち上がるじゃろう」という、上官の不穏な言葉に後髪を引かれながら、今はイタリア統一戦争の歴史を復習しつつエーコを読んでいる。長らく恐れていた耽溺癖は幻想だったのだろうか。むしろ移り気こそが、私の悪癖なのかもしれない。果たして長い長い小説を読む夢はかなうのだろうか。今度はそっちの方が心配になってきている。

立山連峰の絶景

加藤憲治

この 2026 年３月に定年退職して２か月余り経ちました。通常の退職であれば､研究室の貸し出し図書を返却し、私物の図書やノートの類を家に持ち帰り整理することで次なるステージに移ることになるのでしょう。他の大学で再就職するのは最近では難しいようですが、非常勤講師をしながらまだまだやり残した仕事を継続する、あるいはライフワークと思い定めた仕事にこれまで以上に邁進できればそれはこれ以上ない研究者生活と言えましょう。ただ残念なことに私の場合、３０年以上に亘る関西の仮住まいを引き払い、生まれ育った富山の実家を建て替え移り住んだため、未だに多くの段ボール箱に囲まれ、身動きできない状態にあります。当初は１日３～４個の段ボール箱を空けていけばゴールデンウィーク頃には落ち着いて仕事ができるようになるだろうと楽観していました。しかし、それほど本を所有しているとは思っていなかったのですが、本を並べるために新たに多くの本棚を購入したり、新生活の諸々の手続きにも対処しなければならないので中々次なるステージに移れていないのが現状です。
家の中がこのように落ち着かない状況ですが、日常生活の買い出しのためにママチャリで出かけると、思わず立ち止まって見てしまう立山連峰に遭遇することがあります。北陸の天候の影響でそういう時はなかなかないのですが、こうした時は「戻ってきてよかったなぁ」とふと思ってしまいます。この連峰が冬は雪を降らせるわけですが、平野へ、そして富山湾へ水をもたらしてくれます。まさしく山の幸、海の幸の源です。この連峰に私たちは生かされているんだ、という感慨が湧き出てきます。鮭が産卵ために生まれ育った川に海から戻ってくるように、今私は故郷に戻ってきています。同様に私もこの地でこれまで抱いていた哲学的な考えを展開できれば、これまで受けてきた恩義に報いることができるのではないか､などと考えています。そのためにもまずはともかく目の前の段ボール箱を片付けることから始めねば。

本郷から神戸、そして本郷へ

佐藤昇

この春、13 年半にわたってお世話になりました神戸大学大学院人文学研究科を離れ、東京大学大学院人文社会系研究科に移りました。学部･大学院時代を過ごし、その後、助教として勤めた場所への異動ですから、初めは古巣に戻るような心持ちでいました。ところが、いざ実際に戻ってみると、思いのほか違和感を覚えることが少なくありません。学生の気質も教育や研究を取り巻く環境も記憶の中のそれとはだいぶ違って見えます。
それも無理のないことかもしれません。神戸で過ごした 13 年半はずいぶん濃密な月日でした。教育面では卒論・修論演習や英文購読の機会に古代から現代に至るまで、西洋の様々な歴史について学生とともに学ぶことができました。またオックスフォードやロンドンでの在外研究、KOJSP の運営、疫禍対応、副研究科長職、史学講座での共著出版など、本当に多様な経験をさせていただきました。もちろん一人でできたことなど一つとしてなく、多くの方々の支えがあってこその日々でした。そうした年月を過ごすうち、自分自身がすっかり神戸仕様になっていたのかもしれません。あるいは単に歳を取っただけでしょうか。神戸に赴任したのは 30 代の終わり、今は 50 代の初めなのですから。
通勤もすっかり変わりました。神戸では大学の近くに住み、テニスコート脇の坂道を学生に負けじと上るのも、ちょっとした楽しみでした。今は片道一時間半。大学に着くころにはもうすっかり疲弊しています。それでも時折、お茶の水や本郷の裏道を遠回りして歩くと、昔の記憶がふとよみがえります。
こちらで要職に就く気配は当面ありませんが、頼まれ仕事や学会の仕事は減るどころではなく、気がつけば研究室に籠る日々です。それでも夕刻に構内を歩いていると、ときどき昔と今が不思議な具合に重なり合うことがあります。そんな感覚を大切にしながら、しばらくは本郷での新しい日々を過ごしていこうと思っています。

KOBE UNIVERSITY

2026年11月7日(土)

神戸大学 ホームカミングデイ

六甲祭と同日開催

第20回 11/7(土)

神戸大学 ホームカミングデイ2026

10:20～記念式典
於：出光佐三記念六甲台講堂（登録有形文化財）
YouTubeにてライブ配信

※詳しくは下記のホームページをご覧ください。
第20回神戸大学ホームカミングデイ 検索



文学部ホームカミングディ2026

13:00～13:30	受付　文学部A棟1階エントランスホール 会場:文学部B棟
13:30～13:40	開会挨拶、文学部長挨拶
13:40～14:30	卒業生による講演 〔講演①〕「「正しさ」からの自由―弁慶の誕生と室町時代の社会・文化―」 （灘中学校・灘高等学校教諭　藪本　勝治 氏 2011年博士課程後期課程修了）
14:30～15:20	〔講演②〕「言語学研究から教育実践へ、日本式体験学習によるスリランカの次世代育成」 （沖縄大学名誉教授、スリランカ Kibou International College理事長 ディリープ・チャンドララール氏 1992年博士課程後期課程修了）
休憩	
15:30～16:00	第20回文窓賞授賞式及び受賞者スピーチ
16:00～16:20	文窓会総会
16:30～18:00	懇親会　ランスボックス2階 誘い合って1人でも多くの方にご参加いただきやすくしました 参加費無料!



＜併設企画＞

12:50～16:00

A棟1階エントランスホール

教員研究プロジェクト・活動記録などの展示

■お問い合わせ先
人文学研究科総務係
〒657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1
Tel: 078-803-5591

KOBE UNIVERSITY

文窓会（文学部同窓会）ホームページ
https://www.bunsokai.com

＊第20回文窓賞（学生レポートコンテスト）入賞者の作品は、ホームページ「文窓」でお読みいただけます。